

聖書：ローマ5：12～17

説教題：いのちにあつて支配する

日時：2015年8月9日

1～4章で「信仰義認」の教理について語ったパウロは、第2の区分である5～8章で「信仰義認」に引き続く様々な救いの恵みについて語っています。特にこの5章に入って目に留まるのは、2節の「神の栄光」という言葉です。これは、このところ繰り返して申し上げていますように、神ご自身が放つ栄光という意味ではなく、義と認められた私たちが最後にたどり着く救いの最終状態のことです。神ご自身を鏡で映し出すように私たち自身が栄光に輝く状態に達することです。私たちの行く手にはこのような祝福が待っています。そしてこのゴールに至るのは確実だ！ということをパウロは語っています。

今日の箇所もその流れの中にあります。パウロはこの「栄光の救いは確実である」という教えをより確かなものとするため、「キリストとの結合」というテーマに焦点を当てて行きます。この聖書の教えは、突然取って付けたようなものではありません。これは神が全人類を取り扱われる方法と一貫しています。この聖書のメッセージをより良く理解するために私たちが知る必要のあることは、実はもう一つの結合があるということです。それは最初の人間アダムとの結合、あるいはアダムとの連帯です。これを正しく理解することによって、私たちはキリストとの結合をより良く理解し、そのことによって益々救いの確かさを確信することができるのです。また栄光に向かって望みに溢れた歩みへと導かれるのです。

さて、まず私たちが知る必要のあるのはアダムとの連帯です。聖書から知ることは、創世記に出て来る最初の人アダムは単なる個人ではなかったということです。彼はこの世界に最初に置かれた人間として、全人類の代表あるいはかしらとしての立場にありました。彼もまた、そういう立場に自分があることを良く理解していました。ですからその彼が神の言葉を捨てて罪を犯した時、それは彼個人の罪とは見なされなかった。彼はその罪によって、後に続くすべての人類を罪と死に引き入れたというのが12節の意味です。「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、—それというのも全人類が罪を犯したからです。」

ここにいくつかの注目すべき真理があります。その一つは人間の死は罪の結果、入って来たものであるということです。人間は誕生したら、やがて老いて死ぬようと最初から造られたのではありませんでした。神のかたちに造られた人間は、神と交わ

って永遠に生きるべき存在でした。しかし罪の結果、さばきとしての死が世界に入って来ました。もう一つ述べられていることは、死はアダム一人にとどまらなかったということです。彼が持っている特別な立場のゆえに死は全人類に広がりました。12 節最後に「それというのも全人類が罪を犯したからです。」とあります。これはアダムに続く人類がアダムの罪の性質を引き継いで、それぞれが罪を犯したということを行っているではありません。そうではなく、アダムが罪を犯した最初の出来事は全人類が罪を犯したと言われる出来事であったということです。アダムが罪を犯したことに於いて彼と連帯しているすべての人が罪を犯したのです。

この真理の論証が 13～14 節にあります。「というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。ところが死は、アダムからモーセまでの間も、アダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々をさえ支配しました。アダムはきたるべき方のひな型です。」パウロがここで注目させているのはアダムからモーセまでの間、すなわちモーセの律法が与えられる以前の時代です。その時期にももちろん罪はありました。ですからたとえばソドムとゴモラのさばきが行なわれました。しかしモーセの律法がまだ与えられていないという意味で、明確な規定はありませんでした。そういう時代の人々もみな死んだということにパウロは注目させています。そこにはアダムの違反と同じようには罪を犯さなかった人々がたくさんいました。アダムははっきりと「善悪の知識の木から取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」と言われていましたが、そのようなはっきりした禁令を受けて、それを破った、というわけではない人たちがたくさんいました。なのに彼らもアダムと同じように死にました。これはどう説明されることでしょうか。それは 12 節後半で見たように、アダムが罪を犯した出来事において全人類も罪を犯したからです。問題にされているのは一人一人の違反行為ではありません。アダム一人の違反です。全人類のかしらであるアダムが罪を犯したので、彼と連帯しているすべての人も罪を犯したのです。ですから彼と同じようには罪を犯さなかった人々も死のさばきに服することとなったのです。

このように聞くと、多くの人々は文句を言いたくなるかもしれません。こうなったのはアダムのせいだ！そして神にも文句を言いたくなるでしょう。誰もアダムをかしらとして立てた覚えはない。なのに勝手に彼をかしらと決めて、彼が罪を犯したからと言って我々もそこに巻き込むのは、あまりにメチャクチャなやり方ではないか。もっと一人一人個別に自らの生き方を決定するチャンスと責任を与えるべきではないか、と。確かにある意味ではそうです。しかし私たちがここで注目したいのは、14 節最後に「アダムはきたるべき方のひな型です」とあることです。この「来たるべき方」と

は誰でしょうか。それはイエス・キリストです。アダムは実はイエス・キリストを前もって現わす型であった。つまりアダムとキリストの間には非常な共通点、類似点があるのです。それはどういう点でしょう。それは一人の生き様が他の多くの者に決定的な意味を持つということです。アダムは確かにそれ以後の人々に決定的な意味を持つ人物でしたが、彼のような人は人類の歴史に一人しかいないのではない。実はもう一人、彼と同じように、その歩みによって決定的な運命を他者にもたらすことのできる人がいる。アダムと同じくかしらとして立てられ、その者と結ばれる多くの人の人生を変えることのできる人がいる。その方はイエス・キリストであるということです。

この14節最後の「アダムはきたるべき方のひな型です」という言葉を良く良く思い巡らす時、私たちは文句を言うのをやめさせられるのではないのでしょうか。もしこの代表制という方式を神が取られなかったら、私たちの救いはどうだったでしょう。神は個人個人に自分の永遠の運命を決めるチャンスと責任を与えるべきだ！と言うのは簡単ですが、もしそうしたら、私たちが罪を犯したら最後、救いはもうない！ということになってしまいます。しかし神がアダムを通して人類を取り扱うという方式を取られたからこそ、神はもう一人のアダム、すなわち第二のアダムであるキリストを通して、その方と連帯する者、その方と結ばれる者を救うことができる。私にとってはこの代表制という神の方式の方がはるかに慰めです。なぜならこの方法によってこそ、私の救いはゆるぎない確実なものとなるからです。それゆえ文句を言うのはやめて、口に手を当てて、むしろこのような方法で私たちを救おうと計画された神の知恵、また恵みを思って、驚きと感謝をもって賛美せざるにいられないのです。

そしてキリストとの連帯によって救われることは、アダムとの連帯よりもはるかに勝るということが15～17節で語られています。第一のアダムと第二のアダムであるキリストは、ただ対照的な関係にあるわけではありません。アダムとキリストにはどちらもかしらであるという共通点がありますが、そこには相違点もあります。それはキリストに結ばれる方がはるかに素晴らしい！ということです。15～17節は少し表現が難しいですが、簡単に述べるように努めたいと思います。まず15節で言われていることはこういうことです。一人の人アダムの違反によって多くの人が死にました。確かにアダムの罪はとんでもない結果をもたらしました。しかしもしアダムのしたことがそんなに大きな影響を及ぼしたのなら、神の恵みとイエス・キリストの恵みの賜物は、それにもまして大きな影響を及ぼすということです。15節の「それにもまして」という言葉は、9節や10節、またこの後の17節に出て来る「なおさら」という言葉と同じです。アダムがこれだけのことをしたら、神の御子キリストのわざは「なおさら」15節最後にあるように「満ちあふれる」と表現される豊かな祝福をもたらすのです。

16 節はどういう意味でしょうか。アダムの出来事においては、まずそこにあったのは彼の一つの違反でした。そしてそれに続いたのは罪に定めるということでした。ところがキリストの出来事においてはどうでしょうか。まずそこにあったのは私たち人間の多くの違反でした。それに続いたのは何と義と認められることでした！アダムの場合は一つの違反で罪に定められたのですから、その流れで行けば、多くの違反に続くのは断罪に次ぐ断罪の嵐でしょう。ところがキリストにあっては、多くの違反に続いたのは何と義認でした！ここに私たちの頭では考えられないようなキリストの恵みに満ちたパワーが示されています。

17 節はどういう意味でしょうか。一人の違反によって死が入り、死が支配するようになりました。確かに人間は誰も死の力には逆らえません。しかしイエス・キリストはアダムのしたことにはるかに勝る結果をもたらします。その結果とは「恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりのイエス・キリストにより、いのちにあつて支配する」ということです。キリストによって「死の支配」は「命の支配」へと変わりました。しかし良く見ると、「命が支配する」とは言われていません。「いのちにあつて支配する」。誰が支配するのでしょうか。それは恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々、すなわちキリストを信じて義と認められた私たちです！私たちはまことの王によって救われるだけでなく、その方と結ばれて共に治める者、すなわち「王たち」となる特権にあずかるのです。8章37節：「しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあつても、圧倒的な勝利者となるのです。」 黙示録 22 章 5 節：「もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、彼らにはともしびの光も太陽の光もいらぬ。彼らは永遠に王である。」このようにキリストに結ばれる祝福は、アダムとの対比から考えられることにはるかに勝るのです。アダムとキリストは同じではないからです。キリストは神である方が人となり、その無限の価値を持つ命を捨てて私たちの救いを成し遂げ、かしらとなつてくださった方だからです。その方の恵みはなおさら豊かに満ち溢れるのです。

パウロの話はなお次回に続きます。今日、私たちが心に留めたいのは、「代表制」あるいは「連帯性」というこの神の方式です。もし神が私たち一人一人を個別に扱うだけだったら、私たちに救いの望みはありませんでした。神の律法からわずかでも離れた瞬間、もう救いはあり得ませんでした。しかし神はかしらを通し、代表を通して救われるからこそ、私たちは本当に救われることができるのです！私たちは時に、私の行ないによってでなく、キリストの行ないにすがつて救われるというのは、何となくウソっぽい。本当にこんなことで救われるのだろうか、と思つたりもします。そしてキリストにすぎる際もよそよそしい態度になつたりします。しかしそう考える必要は

ないのです。なぜならこれが神が私たちを取り扱う方法だからです。この神の御心を理解した者が取る態度はただ一つ、それは私たちにとって望みのかしらであるキリストのもとへまっすぐ行くことです。神が立てた「もう一人の代表」、キリストにつながることです。そうするなら、私たちはその方のしたことに基づくすべての祝福にあずかることができる。ヨハネ1章14節：「この方は恵みとまことに満ちておられた。」16節：「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。」第二のアダムから私たちが受けるのは、満ち満ちた祝福です。最初のアダムとは比較にならない祝福です。私たちはそれがどのようなものであるかをさらに聖書を通してよく知りたいと思います。キリストに結ばれることは、これまでのアダムとの連帯にはるかに勝る恵みに生かされることです。「いのちにあって支配する」とまで言われることです。私たちは目を高く上げてキリストに結び付き、この方にあって与えられる祝福を望み見て、その途中のプロセスとして神が必要とされるなら患難さえも喜び、このキリストとの結合において神が豊かに注いでくださる満ち溢れる祝福に生かされて歩みたいと思います。